二代目豐澤團平談の追憶

樋口吾笑記

近松座繁榮當時櫓下竹本大隅大夫の相三味線二代目豐澤團平（仙左衛門）は西區南堀江通に居たが名人大團平の高弟なりき。正月の彈き初めには其の門弟親戚共を集めて賑々敷祝したもので筆者は未明より參會して淨瑠璃を聞き糸を樂みしが素義には松玉、閑遊、青木、光清、一座の大夫三味線で隨分賑かに將棋が好きで田舍初段格、光清、閑遊皆同格團栗の脊較べ筆者も仲間で屢々これ等と手合はせしたが勝越しであつた。一寸も藝惜しみせぬ人で所謂名人肌のうれしい人格者であつた。筆者は常に藝談を聞くため門弟衆の稽古傍聽のため邪魔して居た、左記は其の藝談の一節であるが大分舊い話で感違へ、聞誤りや失念の事も澤山あるべし、そは總て筆者の責任で團平翁の知る所にあらざるを豫め斷り置く。讀者諒焉……

▽……私は子供のとき寺子屋でお師匠様に「讀書百遍意自から通ず」といふ文句の講釋を聞かされ百遍でなく二百遍も遣りました。初めは何の事か分り兼ねますが段々度數が重なるに從ひ自然と薄すら想像が浮びます、益々進んで度を重ねますと彌々はつきり理解され誤解を正す事も得ました。或時師匠（大團平）に此の事を語り、而して之を淨瑠璃修行に應用して居ると話しましたら師匠は大いに喜んで「わしも學問は知らぬが既に其の實際を踏んで來て居る、お前は自分自らそれを實行して來たとはエライ。それを藝の鍛錬に善用したら屹度大成する」と賞揚された。爾來如何なる六ケ敷曲節でも文句でも間でも百遍繰返したら其の一揆の理由、曲節の譯、文句の意義が了解會得されて忘れる事は絶對にありません。且また師匠は「早く沸いた湯は早く冷める」と昔から敎へ居る如く、早く覺えるよりも遲くても覺えた事は決して忘れぬのが修行の要めである、覺えた尻から忘れる樣な事では何の役にも立ちませぬ。早く覺えて早く忘れるは無論いけませぬが皆目無修養で何も知らぬ者が大きい顏して威張つて居るに至つては全然お話になりませぬ。

▽……約千人ある因講員中一人前の口の利ける者が幾人ありませう。太抵は法螺吹きで鍛錬の出來た實力者は眞に曉天の星で殘念乍ら淨瑠璃は滅亡です、私などが如何に頑張つても後繼に偉い人が續かねば滅亡の流れをせき止める事は不可能駄目だす。偉大なる大夫三味線が出て來り立派な作者が現れ新時代に相應した日本固有の精神的節付し日本獨特の大衆を網羅する大藝術でなくてはなりませぬ。古い外題の換骨奪胎物や、あちらでもこちらでも嚙り來り繼合せ式飴細工流の節付では時代に受入れられる氣遣ひなし、三味線も三味線ぢやが、第一は

▽……大夫のねた切れです。大夫の一番大切なるは聲。假令その聲は天稟であつても之に鍛錬がないと續きませぬ。其の火加減、湯加減、打加減によつて名劍と凡劍とに分れる。大

夫の素地は聲である、其の聲の鍛錬、火加減、湯加減はよい歟理想の天品に理想の鍛錬を加へし者果して幾人ありや。讀書百遍と讀み拔き語り拔いて狂はぬ大夫は幾人ありや。或時は堂々と極力語りて實力を表示し或時は三味線に渡して糸の微妙幽玄を味はしめ或は遲れ或は先立ち自由自在に聽衆を擒にしたり縱したりして恍惚たらしむ、これが主人公たる大夫の役目、女房役たる三味線の任務は三分位なものとされてあるが其の腹藝に至りては大夫以上の所もある。此の心得が舞台に實現されたら今日の衰亡狀態を救ひ得たであらう云々と長太息。

此の話は大隅大夫が臺灣客死後であつたが團平も大阪を放れ東京で斃れた。其の後越路、津、吉兵衛、清六、錦、菅、紘阿彌寛治郎、勝鳳、朝、松太郎、猿之助、隨分死んだ、新人は一人も來らず寂びれるは道理なり。

▽……淨瑠璃本場と誇る大阪人！上方人！何面目あつて天下に見んとするか。贊六の綽名を突返す勇氣ありや。國費多端の時に當りて眞に淨瑠璃義大夫節の保存に熱意ある政府當局にどの顏をさげて對せんとするか、愛國血を絞りたる國民の負擔と精算勘定は立派に出來る歟。文化の花は帝都に咲き帝都に實を結ぶものなり、日本因協會は東京都に移轉せんとするものにあらざるか文樂座も亦東京都に引越す意思企畫を有せざるものであらうか。大阪人は此の減び行く藝の姿を漫然と傍觀し得るであらう歟。

謹告

豫て申請中の日本出版會員資格指定の件は昭和十九年九月七日出版事業令第八條の規定に依る日本出版會々員たる資格を有する者なる旨主務大臣の追加指定ありたり此段謹告仕候

樋口虎乙助